

線形代数 I 演習

- 第 10 回 一学期末試験の解答, 2 次正方行列の行列式 -

担当: 佐藤 弘康

■ 試験問題の解答

問 1. 平面ベクトル $u = \begin{pmatrix} -1 \\ 2 \end{pmatrix}$ に直交する長さ 1 のベクトルを求めよ.

解. 求めるベクトルを $v = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$ とおく. u と v は直交するので,

$$(u, v) = -x + 2y = 0. \quad (10.1)$$

さらに, v の長さは 1 だから,

$$\|v\|^2 = x^2 + y^2 = 1. \quad (10.2)$$

(10.1), (10.2) より, $x = \pm \frac{2}{\sqrt{5}}, y = \pm \frac{1}{\sqrt{5}}$ を得る (復号同順).

問 2. 行列 $A = \begin{pmatrix} 2 & -3 & 0 \\ 1 & 0 & -3 \\ 0 & -1 & 4 \end{pmatrix}$ の逆行列を求めよ.

解.

$$\begin{aligned} \left(\begin{array}{ccc|ccc} 2 & -3 & 0 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & -3 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & -1 & 4 & 0 & 0 & 1 \end{array} \right) &\xrightarrow{E_{21}(-2)P_{12} \times} \left(\begin{array}{ccc|ccc} 1 & 0 & -3 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & -3 & 6 & 1 & -2 & 0 \\ 0 & -1 & 4 & 0 & 0 & 1 \end{array} \right) \\ &\xrightarrow{E_{32}(3)E_2(-1)P_{23} \times} \left(\begin{array}{ccc|ccc} 1 & 0 & -3 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & -4 & 0 & 0 & -1 \\ 0 & 0 & -6 & 1 & -2 & -3 \end{array} \right) \\ &\xrightarrow{E_{13}(3)E_{23}(4)E_3(-\frac{1}{6}) \times} \left(\begin{array}{ccc|ccc} 1 & 0 & 0 & -\frac{1}{2} & 2 & \frac{3}{2} \\ 0 & 1 & 0 & -\frac{2}{3} & \frac{4}{3} & 1 \\ 0 & 0 & 1 & -\frac{1}{6} & \frac{1}{3} & \frac{1}{2} \end{array} \right). \end{aligned}$$

したがって, $A^{-1} = \begin{pmatrix} -\frac{1}{2} & 2 & \frac{3}{2} \\ -\frac{2}{3} & \frac{4}{3} & 1 \\ -\frac{1}{6} & \frac{1}{3} & \frac{1}{2} \end{pmatrix}$.

問 3. 連立一次方程式

$$x + 2y - 4z = 2 \quad (10.3)$$

$$2x + 3y + 7z = 1 \quad (10.4)$$

$$3x + 5y + 3z = k \quad (10.5)$$

が解を持つための実数 k の条件を求めよ．また，そのときの解と，解の自由度を求めよ．

解.

(行基本変形)

$$\begin{aligned} & \left(\begin{array}{ccc|c} 1 & 2 & -4 & 2 \\ 2 & 3 & 7 & 1 \\ 3 & 5 & 3 & k \end{array} \right) \\ & \xrightarrow{E_{21}(-2)E_{31}(-3)} \left(\begin{array}{ccc|c} 1 & 2 & -4 & 2 \\ 0 & -1 & 15 & -3 \\ 0 & -1 & 15 & k-6 \end{array} \right) \\ & \xrightarrow{E_2(-1)} \left(\begin{array}{ccc|c} 1 & 2 & -4 & 2 \\ 0 & -1 & 15 & -3 \\ 0 & 0 & 0 & k-3 \end{array} \right) \\ & \xrightarrow{E_{12}(-2)E_{32}(-1)} \left(\begin{array}{ccc|c} 1 & 0 & 26 & -4 \\ 0 & 1 & -15 & 3 \\ 0 & 0 & 0 & k-3 \end{array} \right) \end{aligned}$$

したがって， $k = 3$ のときに限り，上の連立方程式は解を持つ．よって，

(加減法)

(10.3) 式を (-2) 倍， (-3) 倍して
(10.4) 式，(10.5) 式にそれぞれ加えると

$$-y + 15z = -3, \quad (10.6)$$

$$-y + 15z = k - 6. \quad (10.7)$$

(10.6), (10.7) から， $k = 3$ を得る．また， $k \neq 3$ ならば，(10.6), (10.7) を満たす y, z は存在しない．

(10.6) 式を 2 倍して (10.3) に加えると

$$x + 26z = -4 \quad (10.8)$$

を得る．

結局，3 つの式から (10.6), (10.8) の 2 つの式が得られたが，これ以上，未知数を消去して簡単な式にすることはできない．そこで， $z = l (l \in \mathbf{R})$ とおくことにより，

解は

$$\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -4 \\ 3 \\ 0 \end{pmatrix} + l \begin{pmatrix} -26 \\ 15 \\ 1 \end{pmatrix} \quad (\text{ただし } l \in \mathbf{R})$$

である．また，解の自由度は 1 である．

問 4. ベクトル a, b, c が線形独立のとき,

$$a + 2b + 3c, \quad 2a + kb - 2c, \quad 3a + 3b + c \quad (10.9)$$

が線形独立となるための実数 k の条件を求めよ.

解. (10.9) のベクトルが線形独立とは

$$x(a + 2b + 3c) + y(2a + kb - 2c) + z(3a + 3b + c) = 0 \quad (10.10)$$

を満たす実数の組 (x, y, z) は $(0, 0, 0)$ に限ることである. (10.10) 式は

$$(x + 2y + 3z)a + (2x + ky + 3z)b + (3x - 2y + z)c = 0$$

と表すことができ, ベクトル a, b, c が線形独立であることから, x, y, z は

$$\begin{cases} x + 2y + 3z = 0 \\ 2x + ky + 3z = 0 \\ 3x - 2y + z = 0 \end{cases} \quad (10.11)$$

を満たす. したがって,

(10.9) のベクトルが線形独立 \iff (10.11) の解は $x = y = z = 0$ のみ

である. つまり, 斉次連立一次方程式 (10.11) が非自明解を持たないための k の条件を求めればよい.

$$\begin{aligned} \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 2 & k & 3 \\ 3 & -2 & 1 \end{pmatrix} &\xrightarrow{E_{21}(-2)E_{31}(-3)\times} \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 0 & k-4 & -3 \\ 0 & -8 & -8 \end{pmatrix} \\ &\xrightarrow{E_{13}(-2)E_{23}(3)E_3(-\frac{1}{8})\times} \begin{pmatrix} 1 & 0 & 1 \\ 0 & k-1 & 0 \\ 0 & 1 & 1 \end{pmatrix}. \end{aligned}$$

ここで, $k = 1$ ならば, 解は $\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = l \begin{pmatrix} -1 \\ -1 \\ 1 \end{pmatrix} \quad (l \in \mathbb{R})$ となり, 非自明解が存在する.

$k \neq 1$ のときは

$$\begin{pmatrix} 1 & 0 & 1 \\ 0 & k-1 & 0 \\ 0 & 1 & 1 \end{pmatrix} \xrightarrow{E_{13}(-1)E_{32}(-1)E_2(\frac{1}{k-1})\times} \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$$

となり, 解は $x = y = z = 0$ のみであることがわかる. したがって, (10.9) のベクトルが線形独立であるための条件は $k \neq 1$ である.

復習問題 1. 行列

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 & -2 \\ -1 & k & 0 \\ 0 & -2 & 1 \end{pmatrix}$$

の逆行列が存在するための実数 k の条件を求めよ .

復習問題 2. ベクトル a, b, c が線形独立のとき ,

$$a + 2b - c, \quad 2a + kb, \quad 3b - 2c \tag{10.12}$$

が線形従属となるための実数 k の条件を求めよ .

■ 2 次正方行列の行列式

問題 10.1. 次の連立方程式を, 2 つの方法 — 行基本変形と, クラメールの公式 (教科書 p.57, 例題 3.3) — を用いて解を求めよ.

$$(1) \begin{cases} 2x - y = 1 \\ x + 3y = 4 \end{cases} \quad (2) \begin{cases} 3x - 2y = 1 \\ 2x - 5y = -3 \end{cases}$$

例題. 行列 $A = \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}$ は \mathbf{R}^2 の一次変換

$$(x, y) \xrightarrow{\varphi_A} (x - y, x)$$

を定める (教科書 p.58 を参照). 方程式 $y = 2x - 1$ が定める直線は φ_A により, どのような直線に移るか調べよ.

解. $y = 2x - 1$ は次のように媒介変数表示することができる;

$$\begin{cases} x = t \\ y = 2t - 1 \end{cases} \quad (t \in \mathbf{R})$$

したがって, この直線上の点は変換 φ_A により,

$$(t, 2t - 1) \xrightarrow{\varphi_A} (-t + 1, t)$$

に写る. $x = -t + 1, y = t$ において, t を消去すると $y = -x + 1$ を得る. したがって, φ_A により, $y = 2x - 1$ は直線 $y = -x + 1$ に移る.

問題 10.2. 行列 $A = \begin{pmatrix} 3 & 1 \\ -6 & -2 \end{pmatrix}$ が定める一次変換 φ_A により, 次の方程式が定める直線がどのようなものに移るか調べよ.

$$(1) y = 2x + 1 \quad (2) y = -3x - 2$$

問題 10.3. $A = (a_1, a_2), B = (b_1, b_2)$ を \mathbf{R}^2 上の原点 O 以外の点とする. 線分 OA と OB を 2 辺のもつ平行四辺形の面積は, 行列

$$\begin{pmatrix} a_1 & b_1 \\ a_2 & b_2 \end{pmatrix} \quad (10.13)$$

の行列式の絶対値に等しいことを示せ. ただし, ベクトル $\begin{pmatrix} a_1 \\ a_2 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \end{pmatrix}$ は線形独立であるとする.

□ 行列式の符号について

2 次正方行列 A は平面の一次変換 φ_A を定め、平面内の図形を φ_A で移すと、その面積は $|\det(A)|$ 倍される．一次変換とは、原点を中心とした回転作用や、ある方向へ平面全体を伸ばしたり、縮めたりする作用を何回か施す変換である．伸びたり縮んだりするものの、おおざっぱな形は変わらない．ただし、行列式が負の行列の場合は、その作用により図形は裏返ってしまう (下図参照)．行列式が正の行列が定める一次変換を向きを保つ変換といい、行列式が負の行列が定める一次変換を向きを逆にする変換という．また、行列式が 0 の場合、平面内の図形は直線か 1 点に縮んでしまう (問題 10.2) ．

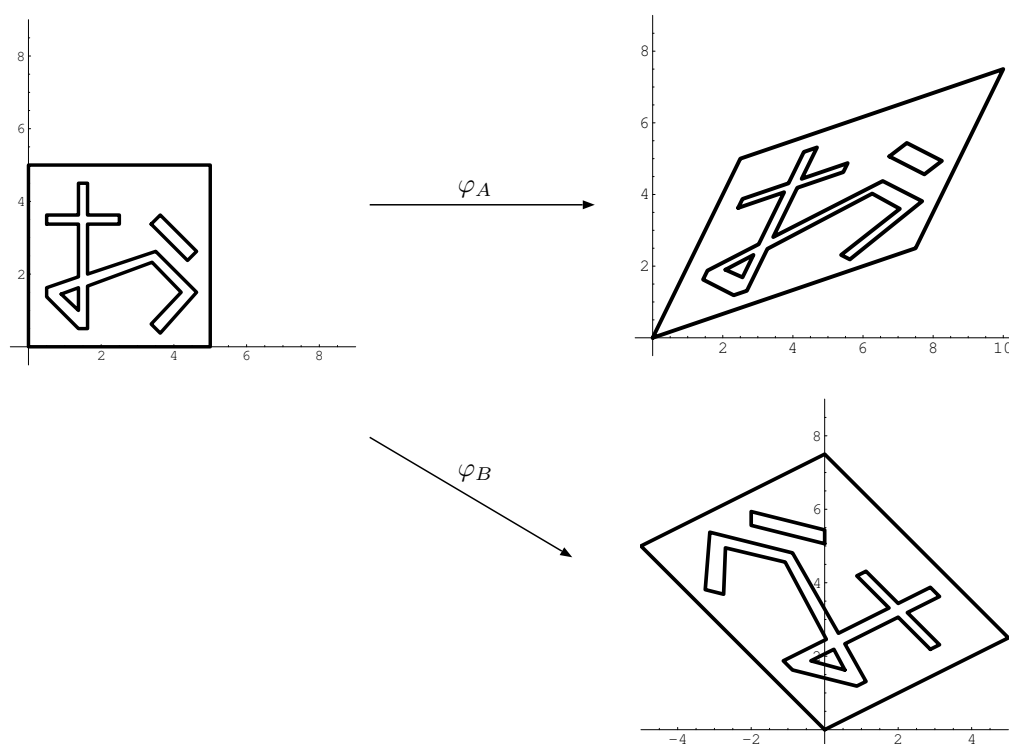


図: 一次変換による像． $A = \begin{pmatrix} 3/2 & 1/2 \\ 1/2 & 1 \end{pmatrix}$, $B = \begin{pmatrix} -1 & 1 \\ 1 & 1/2 \end{pmatrix}$